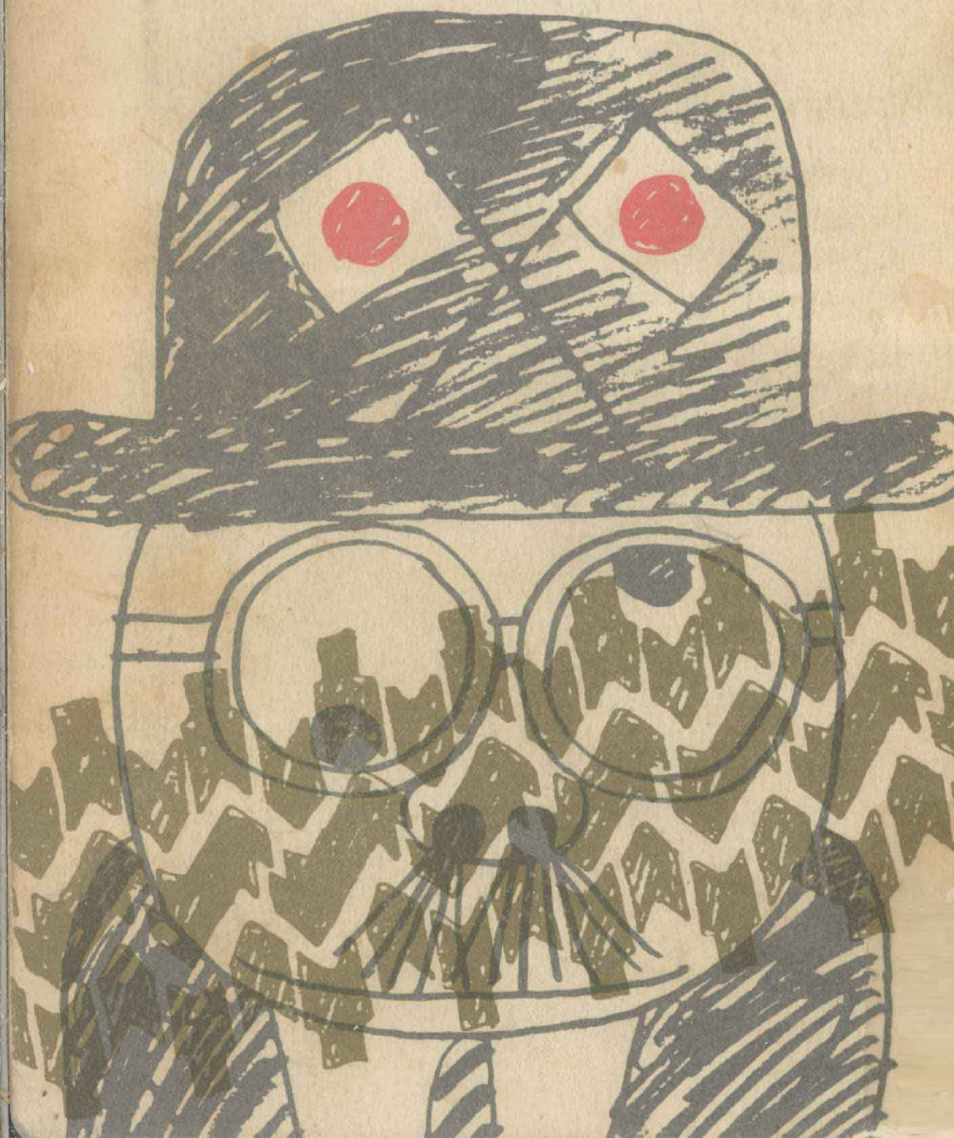


コエモンのニッポン日記

小松左京



《同じ著者によって》

日本アパッチ族 (小説)	1964年 光文社
復活の日 (小説)	1964年 早川書房
エスパイ (小説)	1965年 早川書房
明日泥棒 (小説)	1965年 講談社
地図の思想 (SFルポ)	1965年 講談社
果しなき流れの果に (小説)	1966年 早川書房
未来図の世界 (エッセイ)	1966年 講談社
探検の思想 (SFルポ)	1966年 講談社

ゴエモンのニッポン日記

© Sakyo Komatsu 1966

著者 小松 左京

1966年12月10日 第1刷発行

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社

定価 380円



東京都文京区音羽町3の19

振替 東京 3930

電話 東京 (942) 1111

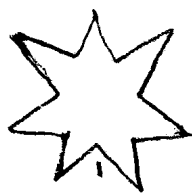
Printed in Japan

乱丁本・落丁本は
お取り替え致します

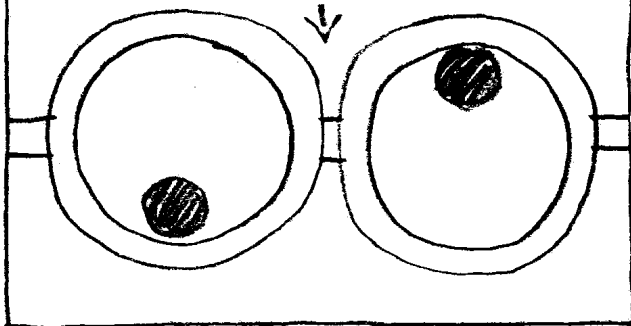
印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 有限会社 大光堂

ゴキウの
ニッポン日記



小松左京



一万年ぶりの日本上陸	7
超過多群生動物	20
“都市生物”の出現	32
増殖する乗物獣	45
女房は家庭に君臨す	56
銀座スラム街	69
空地、空家あります	81
千代田区永田町	94
出入国手続き	106
黒の詰襟服	119

核兵器売ります

殺到する電波

化学調味料コース

毒性にしごかれる種族

モデル海中都市

ご先祖さまはカビである

レジャー・エネルギー

くらげなすただよえる国

大人をリードする子供文化

時間とスピードを食べる

238 225 214 201 190 177 166 153 141 130

真夏の集団精神修養

ご先祖さまがやってきた

勇敢な曲芸師

地球よサバ、ラ、でござる

250

262

274

287

装幀・カット 和田 誠

ゴエモンのニッポン日記

小松左京

一万年ぶりの日本上陸

家にかえてみると、電報がきていた。

文面は――

「ゴエモンキタル」テンヨリキタル」ゴエモン。

私は、いささかあわてた。

ことわっておくが、このゴエモンというのは、例の石川五右衛門とは関係ない。――私の知りあいの、宇宙人である。

ゴエモンという名が、ふざけている、といった所で、そんなこと、私の知ったことではない。そういう名前の宇宙人なのだから、しかたがないだろう。――地球上の外国人の名前でも、日本できけば、ずいぶんおかしい感じのするのがいっぱいある。コンゴには、ボンボコって名の外相がいた。前のアルジェリア首相のベンベラ氏だって、別に人絹ものを着ていたわけではない。よその国、あるいはよその星の、個人の名から、おかしいことを

連想するのは失礼である。私の知りあいの宇宙人は、ゴエモンという名だからゴエモンなのであって、三条河原で釜ユデされた、身分いやしき泥棒の名を思い出させるといって、それをおかしいと感ずるのは、あなたに国際的感覚が欠けており、鼻もちならぬほど幼児的だからである。——ゴエモンの所属する星では、ゴエモンという名は、日本でいえば、島津、徳川、伊達、外国でいえば、ロックフェラー、ハプスブルク、メジチ、ナポレオン・ソロといった、はなはだ由緒ある家系である。

なぜそんな、由緒ある宇宙人と知りあいになったか、というと、これは一年半ほど前、ふと行きずりに知りあいになった、というにすぎない。——その時私は、横浜の山王台あたりで、ぶらぶらしていて、地球についたばかりの、彼に声をかけられた。最初のうちは、彼が宇宙人であるということはわからなかった。だって彼のスタイルが、あまりに突拍子もないものだったからで——そのことは、彼をモデルにした、「明日泥棒」という小説に書いておいたから、ご存知の方もあらう——気のふれたチンドン屋か何かだと思ったのである。

拙著を読まれた方は、ご存知であらうが、彼のスタイルはじめ、いうことなすことが、いかにチンケきわるものであったか——なにしろ身の丈一メートル五〇ぐらいのズングリムックリで、山高帽のリボンに日の丸の小旗をぶっちがいにしたやつをかぶり、上は

モーニングの上衣、下はよれよれの小倉のハカマに下駄ばき、といういでたちで、背にネンネコのおぶい紐でコウモリ傘を斜めに背負い、手には買物カゴをさげ、正面むいた鼻の穴からは、口ヒゲともまがう鼻毛が、扇の骨のごとくひろがり、銀ブチ眼鏡の下のは、上下ヤブという珍しいヤブにらみで、何かにおどろくと、そいつを手旗でもふるみたいに左右たがいちがいにドタバタさせる。おまけに、しゃべる日本語が、関東、関西、東北、九州、の各地方言に、古語や廊言葉（くろぐち）がゴチャまぜという大変なもので——もっとも彼にいわせると、これは、日本の話し言葉を、大急ぎでうのみにして、そのまま棒暗記したからだそう。

考えてみれば、日本語そのものが、きわめて方言が多い上に、古語外来語をふくめると、おそろしく尨大複雑怪奇なものになる。——日本人が外国語を、得意になって、しゃべったりする時だって、むこうの人間がきいたり読んだりすれば、テチナヤルヤル、ミナクルヨロシ式の、きわめてチンケなものになっているかも知れない。英語にした所が、うろおぼえて、アメリカ南部なまりと、スコットランドなまりと、ロンドンなまりと、中世風英語や雅文体とを、ごちゃまぜにつかっているにもかぎらない。——最近きいた話によると、アメリカの南部や、ラスベガスあたりの寄席で、その種のジャパニーズ・イングリッシュの口まねが、寄席芸人のギャグの一つになっていて、カタナモテクル、ヨクキレ

ルアルナ、ソレノムワタシハ、シヌシヌアルヨ式の日本人英語が、お客の腹の皮をよじらせているということである。——これを思えば、ゴエモンのゴチャマゼ日本語や、生まかじりからくる言葉の誤用をも、一概に笑うことはできない。

読者諸君もまた、ゴエモンの言葉をきいて、笑ってはいけない。それは国際儀礼に反することである。——ましてや相手は、地球上の知的生物であるホモ・サピエンスと、へだたることはなほだしい、よその星の知的生物である。地球の人間とは外見こそ似ていても、身体構成物質や新陳代謝のしくみから、風俗習慣言語、その人生観や宇宙観まですっかりちがう、遠い宇宙の彼方の、異星の住人である。多少のまちがいや、食いちがいがあっても当然ではなからうか？——終戦直後のことであるが、まだ中学生であった私は、焼けあとのなまなましい神戸三宮界隈で、中国の人につかまって、いきなり、
「サカガミテンクルマ、ノリパトコ？」

とたずねられたことがあった。その時は、いくら考えてもわからなかったが、あとでよく考えて見ると、「サカガミテンクルマ」とは、阪神電車のことであった。——このデンで行くと、阪急電車は、サカイソギテンクルマということになるかも知れない。

同文同種の人にして、このとおりである。まして、遠い宇宙の人となれば、なおさら多くの思いちがいがあろう。その上——これも追いつ追いつわることであるが——ゴエモン

は、地球よりはるかに科学の進んだ星の人間であり、彼自身も、ちょっと想像もつかないような——まあ、少しオーバーにいうと、その気になれば小指一本で、地球を破滅させるほどの、おそろしい力をもっている。あまり笑いものにして、彼を怒らせないようにした方が、地球のためだ。

ところで、私が、ゴエモンの再訪の知らせをうけてうろたえたのは、さっきもいった通り、あまりに彼がチンケなので、彼が数週間滞在して、宇宙のはてにかえっていったあと、彼に無断で、彼をモデルにしたいいかげんな小説を書いたからだだった。——あまり上等な存在に書かなかったから、もし、それがバレて、彼が怒ったらどうしよう。——そうになったら、私の宇宙的に軽率な行為によって、日本はおろか、地球が破滅しないともかぎらない。怒らせないまでも、モデル料をよこせだの、印税を山わけにしろなどといわれたら、どうしたらいいだろう？　すでに確定申告もすみ、「明日泥棒」の印税など、ごっそり税金にもっていかれてしまった。

それやこれやで、「ゴエモンキタル」の電報をもって、うろろろオロオロしているうちに、

「コンチャース！」

ついにきた！——宇宙人ゴエモンが、例によって例のごとき、山高シャッポに、モーニング上衣、小倉のハカマに下駄ばきという、赤塚不二夫氏のマンガからぬけ出たような恰好で、ぬっとそのものすごい鼻毛を、わが家の茶の間につき出してどなった。

「たのもう！——ごめんやす」

わが家の茶の間に、ドサッと買物かごを投げ出した、宇宙人ゴエモンの態度は、こちらの周章狼狽と関係なく、ひどく意表をつくものだった。——彼はべったり、ネコの座ぶとんの上に腰をおろすと、両手をたたみについて、やにわにドタバタと大粒の涙を——涙をドタバタとおとすというのは、変にきこえるかも知れないが、彼の落涙ときては、とてもハラハラとか、ポタポタなんてなまやさしいものではない。おかげで、あとでタタミ二枚をあげて、天日に乾さなければならなかった——おとし、天井をあおいで叫んだものである。

「ヤンれ、日本はなんとフトか、変り方バなさったのし！——身共はび、く、こいたじョー」

「そんなにかわりましたかね」私は、彼が、モデル問題をいい出さないか、とびくびくしながらきいた。

「はいデス！——もとあった山も海もなく、道で行きかう人々も、顔も知らないものばかり——にて、ありおり侍り」

「山も海もなく、はオーバーでしょう」私は、雑巾を四、五枚と、洗面器を、ゴエモンの顔の下にさし出しながらいった。「もともと、神戸市あたりじゃ、高取山をけずって、海をうめたててるもんで、山がなくなったり、海がへったりしてるそうですがね。東京はオリンピックさわぎのあと、あまりかわってないはずですが……」

「そんなことでは、やか！」とゴエモンはどなった。「拙の来た時は、ここらへんはまんだ、遠浅の海じゃった。——葦がぼうぼう、中洲が二つ三つ、房総半島は、沖にうかぶ、でつきゃ島でのし、浅瀬で葛飾へんとつながってよ、——オオツノシカがおるやら、ムカシマンモスの生きのこりがおるやら、富士山ボカスカ火を噴いて——ああ、のんびりした時代でおざったわいなあ」

「なんですって？」私はおどろいてきいた。

「そりゃあなた、大昔も大昔、一万年も前の話でしょ？——あなた、一年ほど前に、日本へ来たじゃありませんか？」

「あれ、あいつは、やつがれじゃござんせん。——去年来たのは、ゴエモン百二十六万八千九百十一号、わがはいは、同じゴエモンでも、ゴエモン百二十六万八千九百十号にこ

そ、あり、お、り、侍、れ」

「ああ、そうですか——」私はめんくうしながらいった。「つまり、去年きたのとあなたとは、一番ちがいで——兄弟か、ご親戚で……」

「そんなこと、どうでも、ええじゃないか——」と、ゴエモン百二十六万……八千九百十号の方は、うたうようにいった。「あやつより、近代日本に行くための心得を、あれやこれや、とききましたンどすえ。——そやけど、今の日本は、わずか一万年ほどの間にえ、かわったもンだなッス！ ああ、昔の日本はよかったにィ……」

そりゃまア、そうだろう。——昔といたって、一、万、年、も、前、最後の氷河期がおわったころにくらべれば、いまの日本も東京も、「えかく」かわったにきまつてる。——そのころの海岸線は、川越から、大宮、野田をむすぶあたりまではいりこんでおり、埼玉県の東半分は、ほとんど海だった。大阪というなら、淀川源流、琵琶湖のあたりまで海水が流れこんでいた時代である。——なにしろ、現在の沖積平野が、ほとんどないころだ。宇宙人ゴエモン十号氏は、そんな時代に日本を訪れたことがあると見える。

「ああ、ふんとにまったく、昔はよかったですらい……」ゴエモンは、鼻毛をすすりあげ

なからいった。「第一、こんなにゴタゴタゴミ、きたなくなかったぞよ。人も少なく、水清く、空はすみ、——君よ知るや、昔の国……」

「そりゃ、そのころはのんびりしてたでしような」と私は相づちをうった。

「さようさよう——何しろあんたはン、日本全体に、たった五、六万から、六、七万ぐら
いしか、人間がおらんでの——関東地方全部で、一万人そこそじゃ、なかンべか」

「そりゃまた、えらくすくないな」私は、ちょっとびっくりした。「いま、東京都下だけで、一千万人以上いますよ」

ゴエモンが、ギャア！とさけんでひっくりかえたので、私はあわてて彼を抱きおこした。——ゴミをやくような、いやなおいが、ブンとした。

「そりゃまた、えらいこっちゃ！」とゴエモンは叫んだ。「君よ知るや——現在の東京の人口はハイ、紀元前四千年の、世界総人口といっしょじゃとよ。——六千年前に、世界中で一千万人しかおらんかった人類が、いまは東京だけでそんなにふえたかや」

「もっとふえそうですよ」と、私はいった。「現在、世界総人口は三十三億です」

「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ、太閤はんは、えらいやつちゃ……」とゴエモンはうなった。「キリストはんが、うまれたところで、やっと総人口一億におなりやしたのが——
はや、それほどに、ふえにけり。——いったい、地球の人間は、どないしたン？」